

須川長之助翁と岩手大学

岩手大学ミュージアム植物標本室

須田 裕

はじめに

岩手大学ミュージアムが開館したのは2003年の10月だった。岡田幸助館長をはじめ関係各位の熱意と尽力によって、何とか形を整えての開館であったが、急ぎすぎたせいかやや吟味不足の感があったことも否めない。その後展示物の更なる充実が検討されて、2005年秋から展示のリニューアルが実施に移された。

丁度、農学部が長年大切に保管してきた、須川長之助翁採集による植物標本の整理が終わったのを機会に、その成果を公開することになった。新たにコーナーが設けられ、紹介パネルや植物標本および検索用のデータベース端末が置かれて準備が整った。

2006年4月、岩手大学ミュージアムは展示リニューアル記念と名づけ、学内外への情宣活動を兼ねて展示・講演会を開いた。その一つが「須川長之助展および講演会」である。本稿はそのときの講演「須川長之助翁と岩手大学」に補筆したものである。

I. チョウノスキーは長之助

1884、5年頃、大英帝国の首都ロンドン、王立キュー植物園の植物標本館で、伊藤篤太郎博士は日本産の植物標本を検閲していた。調査が進むにつれて、博士は相当数の標本にマキシモビッチの筆跡で Leg. Tschonoski (チョウノスキー採集) の記入があることに気がついた。その時は、博士は語感から Tschonoski はロシア人とはばかり思われていたようである。帰朝後の1889年秋、ロシア公使館の紹介で、博士の祖父伊藤圭介翁の自宅(東京本郷真砂町)を長之助翁が他の一人を同伴して訪ねてきた。そこではじめて博士は、Tschonoski は日本人須川長之助であることを知ったという。しかし、博士が長



図1 聖垂使徒ニコライ大主教 (1836~1912)

之助翁に直接面会したのはもっと後のことで、東京神田駿河台のニコライ主教（**Nikolai 1836~1912** 本名：**Ioan Demitrovich Kasatkin** イオアン・デミトロヴィッチ・カサートキン 1906年、大主教に昇叙）（図1）の許であり、時期は記録されていないが、1889年以降長之助翁が郷里に帰る1891年までの二年間の何時かと推定される。長之助翁の印象について博士は“状貌朴素質直ニシテ田里農民ノ風アリ”と書き記している。

II. マキシモビッチと須川長之助

マキシモビッチ（**Carl Johann Maximowicz 1827~1891**）（図2）



図2 C. J. マキシモヴィチ

マキシモビッチは、1827年モスクワ近くのツーラ市（**Tula**）の医師の家に生まれた。長じてドルバット大学に入学。在学中、高名な植物学者アレキサンドル・ブンゲ教授（**Aleksandr Andreevich von Bunge 1803~1890**）の強い感化を受けて、東亜の植物に興味を持つようになり植物学研究を志すに至った。卒業後同大学の植物園に職を得て、以後三年間ブンゲ教授の仕事を助けた。

1852年にはサンクト・ペテルブルグの国立植物園標本室の研究員となる。翌年ロシアの軍艦ディアナ号（**Diana**）に乗船、学術探検隊の一員として南米ブラジル、チリー、ハワイを廻り、更に転じて東部シベリア、沿海州に向かった。クリミア戦争の勃発によって予定は変更、約三年彼の地にそのまま滞在することになる。アムール地方の植物調査を終えて、1857年、サンクト・ペテルブルグに帰着。成果は「アムール地方植物誌」**Primitiae Florae Amurensis** として公刊され、東亜植物研究の第一人者としての地位を不動のものとした。

1858年、江戸幕府は日米修好通商条約を調印（図3）。続いてオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも修好通商条約を締結して、翌1859年には神奈川（現横浜）、長崎、箱館（現函館）、新潟、兵庫（現神戸）の五港を開港、貿易を開始した。

日本開国を知ったマキシモビッチは、翌1860年、箱館に渡来する。その目的は、もちろん日本の植物相（フロラ）の調査にあった。しかし、当時の日本は桜田門外の

変（1860）でも知られるように、依然として尊皇攘夷論が吹きまくり、その上外国人に対する旅行制限も厳しかったので、有能で信頼のおける日本人「助っ人」なしでは、植物相の調査など到底望むべくもなかった。従って、長之助との邂逅は、マキシモビッチにとっては願ってもない僥倖であったといえる。

我が国に滞在すること三年余、幾多の植物標本と研究成果を携えて、1864年マキシモビッチは喜望峰を廻って帰国の途についた。爾後二十七年専心東亜植物の研究に従事し、1866年以降その死に至るまで続々と研究成果を発表した。惜しむらくは、準備中の「日本植物誌」の完成を見ずに、流行性感冒がもとで逝去されたことである。享年六十四歳。

須川長之助（1842～1925）（図4）



図4 須川長之助翁 岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵

須川長之助は1842年、岩手県紫波郡水分村字下松本（現岩手県紫波郡紫波町下松本字元地）において農業与四郎の長男として出生。須川家は、祖父彦三郎のときに分家した小作農で、田畑は狭く生活は豊かではなかったという。長之助は十二歳で奉公に出されたこともあって手習いの機会もなかったが、必要に迫られて独学独習し、ある程度の読み書きはできるようになっていた。

年季奉公を終えて家に戻った長之助は、一家の働き手となった。しかし1860年、十八歳の時に故あって北海道箱館に渡り、数々の職を転々とした後、1861年に来日中のロシアの植物学者マキシモビッチの掃除夫兼風呂番として雇われることになった。時にマキシモビッチは三十四歳、長之助は十九歳であった。正直で働き者の長之助はやがてマキシモビッチの厚い信頼を得て、植物採集の方法や乾燥標本作製の手ほどきを受け、採集助手としてマキシモビッチの採集



図3 日米修好通商条約100年記念 咸臨丸（右）と大統領の引見（左）1960, 5, 17. 発行

旅行に同行するようになる。当時我が国は、貿易のため五港を開港して外国人居留地を設けたが、駐日公使・領事以外は十里の域を出ることは禁じられていた。従ってマキシモビッチは、本邦に在留中かなり束縛された生活に甘んじていたわけで、代わって長之助が単身採集に出たことが多かった。

1861年秋、マキシモビッチ・長之助主従はアメリカの商船セントロイス号に乗り組み、長崎への採集旅行に旅立つ。途中横浜に寄港し、そこからイギリスの軍艦セントアルス号に便乗して、1862年の年明けに長崎に到着した。その年三月、主従は長崎から横浜に戻り、横浜、江戸の近郊を採集、箱根、富士山へも足を伸ばしている。余談になるが、この横浜滞在中に生麦事件（1862）が起きており、マキシモビッチも他の外国人と共に一時は武装して戦う覚悟だったと、後に来訪した宮部金吾（北海道帝国大学教授）に語っている。その後再び長崎に至り、およそ一カ年滞在。この間に九州各地を跋涉し、英彦山、阿蘇山、霧島山、温泉岳にまで足跡を残している。

往来手形等の資料からは、マキシモビッチはロシアでも高名な学者であったから、公使あるいは領事とまではいかずとも、特別に士官待遇としての便宜を図られていたように窺われる。およそ150年も前に、阿蘇山や霧島山にマキシモビッチ・長之助主従が手を携えて登っていた、と想像してみるのも楽しいではないか。

1864年、マキシモビッチの帰国後も、長之助は依頼により大小さまざまな採集旅行に出かけている。次ぎにその概略を記す。(1) 1865年には信州へ、(2) 1866年には南部地方を主とし、岩手山、早池峰山および駒ヶ岳（秋田）および恐山へ、(3) 1887年には信州の木曾駒、御岳、駒ヶ岳、浅間山、八ヶ岳、富士山および天城山へ、(4) 1888年には、紀伊、九州および四国へ、(5) 1889年には東海、京畿、山陰、北陸および甲州地方へ、(6) 1890年には、南部地方を中心に岩手山、早池峰山、秋田県矢島に至り鳥海山に向かったが、降雪に阻まれて本荘、角館を経て帰宅。なかでも(4)、(5)は所要日数がそれぞれ226日、227日と長期におよぶ採集旅行であった。

かくして全国各地で採集された植物は乾燥標本にされて、東京神田駿河台にあるニコライ堂（現東京復活大聖堂教会）（図5）のアナトリー神父（Anatolii 1838～1893 本



図5 東京都千代田区神田駿河台 東京復活大聖堂

イ堂（現東京復活大聖堂教会）（図5）のアナトリー神父（Anatolii 1838～1893 本

名：Aleksandr Demitrievich Chikhai アレキサンドル・デミトリエヴィチ・チハイ）
を通してマキシモビッチのもとに送り届けられた。なかには後にチョウノスケソウの
和名で知られるようになった越中国（富山県）立山産のバラ科の高山植物も含まれて



図6 紫波町下松本の共同墓地 右手の最も奥まった所に
須川家の墓所がある



図7 須川家の墓所 先祖代々の墓（左）と長
之助夫妻の墓（右）

いた。

これらの膨大な資料を基にマキシモビッチは「日本植物誌」を準備していたが、志
半ばで1891年病没する。マキシモビッチの訃報に接した長之助は、二度と本格的な
採集旅行に出掛けることなく、以後農業に専念するようになった。

1925年、故郷にて長之助昇天。享年八十四歳。今も紫波町下松本の共同墓地に眠
っている（図6,7）。翁および妻女の墓石には十字架が刻まれ「神子但似理須川長之助
神子満理也須川佐武子 墓」と銘されている（図10）。

マキシモビッチと長之助の主従は、
単なる雇用者対被雇用者というドライ
な関係ではなかった。厚い信頼と深い
友情の絆で固く結ばれていた。そのこ
とは、マキシモビッチの帰国後も、長
之助はマキシモビッチの要請を受けて、
六回にもわたって採集旅行に出て、膨
大な植物標本をサンクト・ペテルブル
グの植物園に送致していたことや、マ



図8 函館市元町 函館ハリストス正教会

キシモビッチもその労苦に報いるかたちで、多くの日本産植物の学名に Tschonoskiの種小名を残して感謝の意を表していることから明かである。更には、この主従は信仰を同じくする兄弟でもあった。長之助がマキシモビッチに雇われるきっかけになった場所が、ロシア領事館附属のロシア正教会（現函館ハリストス正教会）（図8）であったし、1877年、長之助はかつて岩手県紫波郡日詰町の郡山駅にあった郡山教会（盛岡正教会管轄下の地方教会のひとつで現存しない）で、アナトリー神父より、ダニイルの聖名とともに洗礼を受けている。

III. 事蹟の顕彰

はじめに述べたように、長之助の名前は、専門家の間ではすでに1890年頃からよく知られており、植物採集家として著名な存在だった。例えば、牧野富太郎博士によってチョウノスケソウの和名が発表されたのは1895年、長之助五十三歳のときであった。また、1908年、東北地方巡遊中の大正天皇（註 当時皇太子）が盛岡高等農林学校を訪れた際に、採集標本を台覧に供したとの記録があるが、そのとき長之助は六十六歳であった。植物分類学者でもない市井の一採集家が、存命中からかくも名声を得ていたのは、稀有の例と言えるのではないだろうか。

◇マキシモビッチ他による献名

1. *Cimicifuga dahurica* Maxim. var. *Tschonoskii* Huth.
2. *Berberis tschonoskyana* Regel オオバメギ
3. *Acertschonok ii* Maxim. ミネカエデ
4. *Malus tschonok ii* (Maxim.) C. K. Schn. オオウラジロノキ
5. *Lonicera tschonok ii* Maxim. オオヒョウタンボク
6. *Leucothoe Tschonoskii* Maxim.
7. *Rhododendron tschonok ii* Maxim. コメツツジ
8. *Carpinus tschonok ii* Maxim. イヌシデ
9. *Allium Tschonoskianum* Regel
10. *Trillium tschonok ii* Maxim. シロバナエンレイソウ
11. *Ligustrum tschonok ii* Maxim. ミヤマイボタ
12. *Prunus* × *tschonok ii* Koehne ニッコウザクラ

以上11種2変種が記録されている。そのなかで、伊藤篤太郎の論文（1894）に含まれている1、6及び9の学名には、和名は付されていない。



図9 紫波町上松本 志和稲荷神社 須川長之助翁寿碑

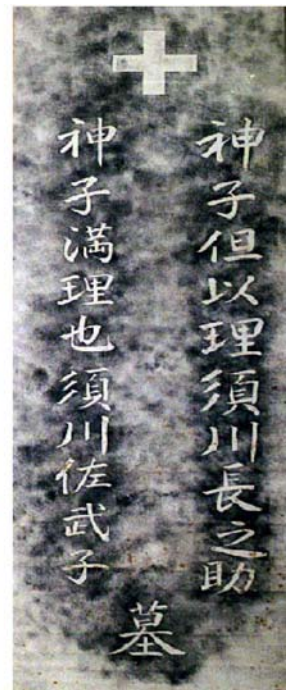


図10 墓碑銘（右）とその裏面（左）に刻まれた岩泉周甫による撰文の拓本 岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵

◇「須川長之助翁寿碑」（図9）

除幕式：1925年4月17日 挙行

須川長之助はその直前の同年二月二十四日に病没

発起人代表：岩泉周甫（1865～1932） 発起人：志和水分有志

碑石：宮城県石巻産 稲井石

所在地：志和稲荷神社社頭（1997年、駐車場正面の鱒沢家庭園の高台に移転）

碑名揮毫：北海道帝国大学総長 佐藤昌介

裏面には上部に大きく草書体横書きで「摘芝採蘭之人」とあり、その下には寿碑建立に賛同した人々の肩書きと氏名が刻まれている。従ってこの寿碑は、関係者以外には、一体須川長之助なる者がどのような功績のあった人物なのか、解らない欠点がある。そこに気付いた岩泉周甫は、遺族の諒解を得て部落の共同墓地に眠る須川長之助翁の墓碑裏に以下のように刻ませた（図10）。

岩泉周甫撰文 “安政六年露国大学校長マキシモヴィチ氏に使へ普く本邦の植物の採集を命ぜられ全国の高山を廻りたる事六カ年マ氏長之助の勞を賞し明治二十年再び採集の状に依り業とせしが同二十三年マ氏世を去りて止とせり今猶永遠に植物採集の勞を世に有名の人となれり”（註 安政六年は万延元年、明治二十三年は二十四年、それぞれの誤りである）

？「カール、ヨハン、マキシモウイチ氏誕生百年記念会」

日時・場所：1927年11月23日、北海道帝国大学中央講堂

主催：札幌博物学会

宮部金吾博士は式辞のなかで、マキシモビッチ氏の本邦のフローラ研究における大きな貢献を讃え、謝恩の意を表した。続いて、外国人居留地から離れることもままならなかったマキシモビッチ氏に代わって、手足となって採集につとめた忠僕須川長之助の人柄と事績を詳しく紹介し賞賛している。



図11 名誉町民証 チョウノスケソウの切手と共に

◇紫波町名誉町民（図11）

名誉町民章：1978年6月10日伝達

“紫波町名誉町民に関する条例第四条第一項により貴殿に対し紫波町名誉町民の称号及び名誉町民章を贈呈します” 昭和五十三年六月十日 紫波町長 福田嘉一郎 故須川長之助殿



図12 高山植物シリーズ第4集 チョウノスケソウの60円切手 1985, 2, 28. 発行

◇郵便切手の発行（図12）

1984年から1986年にかけて発行された「高山植物シリーズ第1集～第7集」のうちの第4集（1985年2月28日発行）のひとつにチョウノスケソウの60円切手がある。

同時に発行された60円切手のナンブイヌナズナもチョウノスケソウと同様、岩手県に縁の深い植物である。しかし、この事実は単なる偶然で、特に長之助の業績を讃える意図は無く、岩手県との結びつきを含意したものはなかったのかも知れない。

一説には、当時紫波郵便局長であった川村哲才氏の尽力により、上部機関に働きかけて実現した成果と言われている。

？日本ロシヤ植物学友好の碑（須川長之助・マクシモービチ顕彰碑）（図13,14）



図13 紫波町城山公園 日本ロシヤ植物学友好の碑（須川長之助・マクシモービチ顕彰碑）



図14 井上幸三による撰文「須川著之助略記」

除幕式：1988年6月26日挙行

発起人：須川長之助顕彰会

所在地：岩手県紫波郡紫波町城山公園内

碑石：台座は紫波町内東根山（928 m）の流紋岩 上部はカナダ産の花崗岩

レリーフ：作者不詳（井上幸三寄贈）

碑文：井上幸三撰文 “須川長之助略記 高山植物「長之助草」で知られる須川長之助は天保13年（1842）紫波町下松本の農家に生まれた。万延元年（1860）箱館に渡り、同地滞在中の世界的植物学者ロシアのマクシモヴィッチに雇われた。生来勤労誠実であったのでマ氏の絶大なる信頼を得た。元治元年（1864）マ氏が帰国するまで忠実な採集助手であった。マ氏の帰国後も命により長年日本各地で採集し、マ氏に送った植物採集家である。

山野の道なき道をかきわけ、多くの苦難と危険に遭遇したこともたびたびで、その採集の労苦は並大抵ではなかったことが記録されている。マ氏はその労苦に報いるために、発見した植物に長之助（チョウノスキー）の名をつけ永遠に記念したものが、実に十数種に及ぶ。日露文化交流と植物学の発展に貢献したマクシモヴィッチと長之助の功績は高く評価されている。その2人を後世に伝えるため



図15 「名誉町民 須川長之助顕彰会だより」

にこの碑を建てる。長之助は大正14年（1925）2月 84 歳で没す（図14）。”

◇「名誉町民 須川長之助顕彰会だより」（図15）

創刊号：1997 年発行（年一回刊行）

編集発行：須川長之助顕彰会

◇紫波町名誉町民・植物採集家 須川長之助木像（図16）

除幕式：2005 年7月3日挙行

発起人：須川長之助顕彰会

所在地：紫波町吉水小深田69-1 水分公民館

製作者：皆川嘉左衛門（1942～）



図16 紫波町吉水 水分公民館 須川長之助の木像

◇井上幸三（1905~2007）（図17） による著書（図18）：

1. 「須川長之助物語」 岩手植物の会 盛岡

（1971）

2. 「日露交流史の人物 マクシモービチと須川長之助」 岩手植物の会 盛岡（1981）

3. 「ダニイル須川長之助」 岩手植物の会 盛岡

（1997）

なお 1, 2, の改訂版を含めると五冊になる。



図17 井上 幸三（1905~2007）



図18 井上幸三による著書 三冊

IV. 長之助の採集標本が岩手大学にあるわけ

盛岡高等農林学校（図19, 20）の設置が決まったのが1902年、学生募集、入学式は1903年5月である。現存する680点余の植物標本が、長之助によって採集されたものであることを裏付ける唯一の証拠は、富樫浩吾の論文（1931）中にある、山田玄太郎か



図19 初代校長 玉利喜造（在任
1903～1909）岩手大学農学部附
属農業教育資料館所蔵



図20 1903年頃の盛岡高等農林学校鳥瞰図 岩手大学ミ
ュージウム所蔵

らの書信のみである。書信の現物、或いは長之助自身による標本への書き込み等は残されていない。いわば状況証拠しかないなかで、それでもなお長之助による採集標本と信じている理由は、富樫浩吾へ宛てたその書信の内容にある。

山田玄太郎からの書信（原文）：

「標本は創立当時（盛岡高農）物品を納入して居った穀町（盛岡市）池野藤兵衛氏の番頭木村某（日詰町医師の子？）から貰ったものです」。（註 穀町は新穀町の誤り）

木村某とは誰か、日詰町医師の子？とあるが事実はどうか、この池野藤兵衛氏は木津屋何代目の当主の池野藤兵衛氏なのか、調査で明らかになったことを補足すると、以下のようなになる。

「植物標本は、盛岡高等農林学校創立当時（すなわち1903年頃）、物品を盛岡高等農林学校に納入していた木津屋（旧盛岡市新穀町 現盛岡市南大通2丁目）の八代目当主池野藤兵衛氏（1871～1962）の筆頭番頭 木村謹蔵



図21 山田 玄太郎（1873～
1943）岩手大学農学部所蔵

氏（日詰町の医師木村文吾（医師名 昌安）の三男）から貰ったものです」

次ぎに資料に基づきながら、若干推測もまじえて解説を試みる。

山田玄太郎（1873～1943 在任期間1903～1921）（図21）は、札幌農学校出身で盛岡高等農林創立時に植物学・植物病理学教室の初代教授として赴任した。1904年2月24日に長之助（六十三歳）は盛岡高等農林学校を訪問。初めて長之助に会った山田は、彼の採集談を聞いてその大要を記録している。また、その折に山田が自ら撮影した長之助の肖像写真（図22）が、巖手植物研究創刊号の口絵として残されている。後に山田は、往来切手や採集手控等の資料を長之助から直接譲り受けているが、植物標本は長之助から直接譲り受けたのではない。



図22 須川 長之助 1904年2月24日

木津屋（図24）は代々当主が池野藤兵衛を名乗る盛岡の老舗で、1658年に萬小間物商として創業。以来350年、呉服以外は何でも扱う雑貨商から出発して、後には主に紙や文房具、事務機を扱う大店になった。現在十一代当主は池野金四郎を名乗る。盛岡高等農林学校の開校当時（1903年）は八代目池野藤兵衛（幼名金之助 1871～1962）（図23）の時代であった。当然、紙や文房具等を盛岡高等農林に納めていたであろう。



図23 八代目 池野 藤兵衛（1871～1962）池野和夫氏提供



図24 盛岡市南町大通二丁目 木津屋本店

原文にある「番頭木村某」なる人物は、筆頭番頭の木村謹蔵（生没年不詳）のことで、八代藤兵衛の直姉おたつと結婚している。日詰町で七代続いた町医木村文吾（1831～1909 医師名は昌安 俳号は半水）の三男である。

本学の農学部附属農業教育資料館には「須川長之助翁記念文庫」があり、長之助ゆかりの品々や資料が収められている。そのなかに、長之助が植物標本作製の際に用い

たという仙花紙がある。今からみると、標本作製に和紙を用いるとはいかにも贅沢と思えるのだが、仙花紙は純白でない楮製の和紙、二枚合せて質厚く極めて強靱で袋紙や合羽の地紙等に使われていたというから、植物標本の挟み紙として繰り返し使用するには最適な和紙であったといえる。地元の新聞「岩手日報」が今年で創立130年というから、当時すでに新聞紙はあったはずだが、長之助は新聞紙の代わりに、丈夫で反復使用可能な仙花紙を挟み紙にしていたのであろう。

サンクト・ペテルブルグに送られた膨大な数の標本からみて、長之助は大量の仙花紙を盛岡市新穀町の木津屋から調達していたものと想像される。仙花紙の縁で長之助の手元に残っていた植物標本が木津屋に渡り、木津屋の筆頭番頭の木村謹蔵がそれらを盛岡高等農林学校の山田玄太郎の許に持ち込んだと推察しても、大きな間違いは無いであろう。

V. 須川長之助翁記念文庫と標本整理

須川長之助翁記念文庫

1908年10月、皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）が東北地方ご巡遊の折本校にご台臨あらせられ、山田玄太郎教授が長之助の採集標本および書類等を台覧に供しご説明申し上げた。その折の「台覧品目録および説明書」から、富樫浩吾（1931）（図25）

は関係部分を転載している（「台覧品目録および説明書」は現存しない）。

“……就中注目スベキハ文久年間露国有名ノ植物学者マキシモウイチ氏ニ従ヒ本邦各地植物採集ニ従事シタル須川長之助ハ当盛岡ノ産ニシテ今猶ホ存命シ居リソノ採集ニ係リタル標本多数ヲ陳列シタル縁故ヲ以テ当時函館奉行等ヨリ発シタル従役免許及通行券ニ関スル書類マキス氏ノ著書等ヲ陳列セリ此マキス氏ハ最モ多ク本邦北部ノ植物ヲ研究シ氏ノ発見ニ依リ本邦植物ノ海外ニ紹介サレタルモノ甚ダ尠ナカラズ長之助ハ彼ノ従僕ト成リテ多年植物採集ニ従事シタルニヨリ本邦及外国名ニモ長之助ノ名ヲ冠シタルモノ数種アリ



図25 富樫 浩吾（1895～1952）
岩手大学農学部所蔵

即チ茲ニモソノ四五種標本ヲ陳列シタリ”

すなわち、長之助が採集した植物標本多数、函館奉行所の発行した従役免許、通行券に関する書類、マキシモウイッチの著書および長之助の名が和名・学名に付いている植物標本四、五種を陳列して、皇太子嘉仁親王の台覧に供したのである。

1928年10月5日、昭和天皇は陸軍特別大演習を御統裁のため、盛岡市に行幸遊ばされた。そして10月7日午後1時、本校よりの献上品並びに天覧品を説明せよとの御詔があつて、鏡保之助校長

(1868～1931 在任：1921～1931) (図26) 以下関係教官十一名が大本営に伺候した。献上品のなかに「岩手県下ニ於ケル重要ナル高山植物二十種ノさく葉標本」があつた。鏡校長は一種ごとに御説明申し上げたのであるが、なかに須川長之助翁がはじめて採集した植物を基にして、マキシモビッチ氏が新種として発表した種類があつた。よつて鏡校長は長之助翁に関して、その生い立ち、学会に対する功勞につき詳細に言上申し上げたところ、陛下は一々うなずき遊ばされてあつたと、富樫浩吾(1895～1952 在任：1926～1946)は記録している(1928)。



図26 三代校長 鏡 保之助(在任1921～1931) 岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵

最近筆者は、本学附属図書館で鏡保之助の筆による「感激」と題する著書を発見した。A5版で3葉の口絵、40頁の本文および附録からなる冊子である。1928年10月の陸軍特別大演習前後について、本校に関する事項を自身の感想をまじえながら、詳細に記述した内容となっている。例えば、本校構内運動場に大演習後の御賜饌場が設置せられたこと、大本営が市内内丸の竣工間もない岩手県公会堂(図27)に設置されると同時に、非常御立退所として本校庁舎の一部、すなわち創立二十五年記念に卒業生より寄贈された記念会館(現岩手大学農学部北水会百年記念館)(図28)が使用せられたことは、誠に本校にとって空前の光栄であつて、長しえに記念すべきものであると記されている。起稿は1930年元旦、発行は同年3月とあるから、富樫浩吾の論文(1928)よりほぼ一年半遅れることになる。

鏡保之助の詳細な記録と富樫浩吾の記述とを合わせると、10月7日午後の献上品並びに天覧品の説明は以下のように経過している。

午後一時、鏡校長と十一名の教授(富樫浩吾もその中の一人)は大本営に参入。4日前の10月3日、献上品並びに研究業績の天覧品は、十分に消毒され神官による修祓式の後大本営に搬入され、その一室に陳列されていた。午後二時、天覧室に出御あら

せられた天皇陛下に、献上品 (1) 岩手県下に於ける重要なる高山植物二十種のさく葉



図27 盛岡市内丸 岩手県公会堂



図28 盛岡市上田三丁目 岩手大学農学部北水会
百年記念館

標本、(2) 最近東北地方に発見せられたる竹九種のさく葉標本、(3) 馬匹年齢鑑定用歯実物標本について、鏡校長が御説明申し上げた。

また教官の研究業績の天覧品は、17項目を選定して陳列・展示した。鏡校長がそれぞれの事項について御説明申し上げ、御下問ある場合には、随行した専門の教官がそれぞれお答え申し上げた。

この著書では、附録として献上品及び天覧品説明の概要が本文と同じ40頁にもわたって記載されている。例えば「岩手県下に於ける重要なる高山植物二十種のさく葉標本」については、高山植物二十種の和名と、それらの植物は教授富樫浩吾が岩手山及び早池峰山で採集し調製したものであること、さらには早池峰山の固有種、稀産種、長之助が採集した標本をもとにマキシモビッチが記載をつけて新しい学名をつけた種、マキシモビッチが長之助に献名した種（すなわち *tschonoskii* を種小名に用いているもの）、岩手山が分布の南限になっている種等の説明が記されている。これらの説明の中で、鏡校長は長之助翁に関してその生い立ち、学会に対する功勞につき言上申し上げたのである。

現在農業教育資料館が所蔵している「須川長之助翁記念」と銘打たれた陳列・展示用戸棚（図29）とその内容物品は、この著書の附録には含まれていない。また仮にも天覧に供する陳列戸棚とあれば、材料、仕上がり共に厳しく吟味したと考えるのが自然であろう。現存する戸棚は天覧品にしては、いかにも質素過ぎるように思える。

富樫は10月7日以後も、鏡校長の命に依り再び長之助翁の生家を訪ね、翁の墓に詣で、翁を知る人々と直接面接して、可能な限り多くの遺品と資料を得ることに努めた。

そして論文（1928）末尾に「本校所蔵長之助翁遺品其の他の目録」として記載している。この目録には、それまで蒐集した物品名、蒐集者・提供者名、蒐集年月が記録されている。盛岡高等農林学校創立当時の1903、04年頃、山田玄太郎が直接長之助から譲り受けたものと、1928年、昭和天皇の盛岡御行幸の前後に、富樫浩吾が長之助



図29 「須川長之助翁記念」陳列・展示用戸棚（左）とその扉を開いたところ（右） 岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵

の生家から譲り受けたものに分けられている。

かくして蒐集された遺品や資料を整理して、あらためて陳列・展示用戸棚に収め「須川長之助翁記念」と銘打って後の供覧に備えたと考える方が妥当であろう。

爾来八十有余年を経るなかで、更に1930年9月には秩父宮雍仁親王が当地の騎兵第三旅団第二十三連隊（図30）に見学入営中、盛岡高等農林学校にご台臨あらせられ、

富樫浩吾が長之助の事蹟を説明している。続けて富樫は、“・・・其の他貴賓著名の士の本校を訪ねる事ある時には、常に吾が校の至宝として長之助翁の遺品及び採集標本等を供覧に備えて、其の偉大なる遺業を偲んで居る次第である。”と結んでいる。



図30 盛岡市青山二丁目 旧騎兵第三旅団第二十三連隊営門跡

1997年、ときの農学部長高橋壯（1935～学部長在任：1996～2000）（図31）は「須川長之助翁記念文庫」と名づけ、新たに作成した資料目録と植物標本目録を添えて、遺品、



図31 農学部長 高橋 壯（在任
1996～2000）岩手大学農学部所蔵 採集植物標本の整理

盛岡高等農林学校創立当時、木村謹蔵氏より寄贈された植物乾燥標本は、前述の通り本校を訪れた賓客に、本校の至宝としてその一部が観覧に供せられたが、それ等の同定や目録作成を含む本格的な整理は、第二次世界大戦後に持ち越された。

最初に目録をまとめたのは雪ノ浦参之助（1899～1993）である（図33）。雪ノ浦は、盛岡高等農林学校に助手として在職中（1922

～1940）に、長之助の標本を整理編述した。そして1949年から1973年にかけて、五篇の論文にして公表している（雪ノ浦 1949a, 1949b, 1951, 1972, 1973）。

標本整理にあたって雪ノ浦のたてた基本方針は、同定を自ら行うのではなく、当代一流の分類学者・専門家に託することであった。すなわち中井猛之進、本田正次、前川文夫、原寛、猪熊泰三、小泉源一、北村四郎、田川基二、牧野富太郎、堀川芳雄、館脇操の各氏が同定者に名を連ねている。この先見性に富んだ方針が、後々の整理を容易かつ正確なものとした。

関係資料および植物標本等のすべてを、岩手大学附属図書館に移譲した。しかし、2000年の附属図書館改築を機に、再びそれらは大修復成った古巣の農学部附属農業教育資料館（1994年国重要文化財指定）（図32）へと移されて、現在に至っている。

初代教授山田玄太郎、それに続く三代教授富樫浩吾をはじめとする植物学・植物病理学研究室の歴代教授の面々が、これらの品々の継承保存にいかにか心を砕いてきたかを、これらの事実から読みとることができる。



図32 盛岡市上田三丁目 岩手大学農学部附属農業教育資料館

なお、台紙に残っている書き込みやラベルの筆跡は、整理・同定の折に記されたもので、長之助本人のものではない。台紙には同定者の略記やラベルが残っているものも多々ある。



図33 雪ノ浦 参之助 (1899~1993) 雪ノ浦達雄氏提供

1997年、「須川長之助翁記念文庫」を図書館に移管するに際して、農学部長 高橋 壯（植物病理学 岩手大学名誉教授）は所蔵の遺品を再点検して新たに目録を作成し、更に雪ノ浦が作成した標本目録と標本の現物を一つひとつ照合した。その結果、(1) 雪ノ浦が記載した772点のうち現存するのは680点で、92点が所在不明であること、(2) ニシキギ科およびスイカズラ科の標本が欠落していることを指摘している。

2003年10月に岩手大学ミュージアムが設置されるや、農業教育資料館の「須川長之助翁記念文庫」に額縁入りで展示されている8点を除くすべての標本がミュージアムの植物標本室に移管され、筆者が整理に当たった。

また本ミュージアム開設と同時に、「岩手大学ミュージアム植物標本データベース作成委員会」も発足した。平成16年度（2004年度）には、(1) 科名の配列は A. Engler's Syllabus der Pflanzenfamilien による。(2) 和名は現代仮名遣いで記し、学名には原則として「日本の野生植物 平凡社」に用いられている新しい学名を使用する。(3) 同定者の略記、旧番号、意味不明の数字は省略して、新たに標本番号 IUM0000 を付す。(4) すべての標本について、採集記録と画像を載せる。との基本方針のもとに“須川長之助採集の植物標本”のデータベースを完成した。

記録を辿ると長之助は、始めは一種類につき30 個体、珍しいものは40 個体採集している。1887 年以降は一種類につき10 個体程度に止めたが、常に花・果実と両時期の標本を揃えるべく努めていたとある。長之助は文字を書くのが不得手であったので、採集記録は、同行した菱川周作、斎藤松太郎（いずれも日詰町の人）の両人が書記として記帳に当たっている。その内容はたとえば、一種類ごとに番号を付し採集場所、国や村および採集月、更に地形について、例えば山、畑、浜辺、原、路、林等と詳しく記録している。従ってマキシモビッチのもとに送付された乾燥標本は、非常に完成度の高いものであったと想像される。

また伊藤篤太郎（1894）が、“・・・予前年同人採集ニ標品ヲ博物局ニ於イテ見シコトアリシガ其調製極メテ宜シキヲ得一見直ニ其技ニ熟達セルヲ知レリ・・・”と記していることから、その質の高さが裏付けられる。

しかし、手元に残されていたさく葉標本は、前者に比べると完成度の点でやや低く、採集場所、採集年月日等の採集記録も一部欠落している場合が屢々で、必ずしも学術的価値が高いとは言い難い。とは言え、我が国近代植物学の黎明期にあってマキシモビッチを助け、日本植物研究の発展に寄与した植物採集家須川長之助によるさく葉標本として、その歴史的価値は高く評価されるであろう。

VI. チョウノスケソウ(長之助草) の話

この和名は、1889年8月に須川長之助が越中国（富山県）立山で採集したバラ科の高山植物が発端になっている。長之助はそのさく葉標本を、すでに帰国していたマキシモビッチのもとへ送った。マキシモビッチは、ヨーロッパ産の *Dryas octopetala* L. とは別種とする考えだったようだが、*Dyas tschonoskii* の裸名を残したまま1891年に病没した。

たまたま、その控えの標本と長之助の採集ノートを手に入れた牧野富太郎（1862～1957）は、これをヨーロッパ産の *Dryas octopetala* L. と同一種と判断した。そして発見者須川長之助の名に因んで、新しく「チョウノスケソウ」の和名をつけて発表した（牧野 1891）。その後牧野は、信州（長野県）赤岳（1897, 8, 9. 矢澤米三郎採集）や駒ヶ岳（1893 羽田貞義採集）の標本も調べて、それらも同じチョウノスケ



図34 チョウノスケソウ *Dryas octopetala* L. var. *asiatica* (Nakai) Nakai 紫波町下松本 藤原修一氏栽培

ソウ *Dryas octopetala* L. と同定している（牧野 1901）。なお、矢澤は、独自にミヤマグルマの和名を使用している（矢澤 1897）。

1916年、中井猛之進（1882～1952）は、朝鮮半島の白頭山の標本（中井 1762, 森7）を調べてヨーロッパ産の母種の一形とし、*forma asiatica* Nakai を区別した（中井 1916）が、1932年には変種に昇格させて、*Dryas*

octopetala L. var. *asiatica* (Nakai) Nakai とし、牧野が *Dryas octopetala* L. と同定した標本をすべてこの学名のもとにまとめた（中井 1932）。すなわち、チョウノスケソウの和名（矢澤のミヤマグルマ）はそのままであるが、正式な学名として現在定着しているのは、*Dryas octopetala* L. var. *asiatica* (Nakai) Nakai の方ということになる（図34）。



図35 チョウノスケソウ *Dryas octopetala* L. var. *asiatica* (Nakai) Nakai 岩手大学ミュージアム所蔵

これとは別に、*Dryas octopetala* L. とは別種 *Dryas tschonoskii* Juzepcz. とする Juzepczuk (1893～1959) の説（Juzepczuk 1929）もある。

ホームページ表紙の写真は、1906年8月11日、信濃の国（長野県）白馬山にて三浦道哉が採集した標本であり（IUM2466）、牧野の見解を支持して、ラベルには「長之助草 *Dryas octopetala* L. 」と記入されている。現在農学部附属農業教育資料館の「須川長之助翁記念文庫」に収められ展示されている（図35）。

謝 辞

自然史研究家 井上幸三氏および須川長之助顕彰会 泉館重雄氏には、文献の蒐集はもとより、幾多の情報提供と貴重なご助言を賜る等、多大なご協力をいただいた。池野和夫氏は、木津屋八代目当主池野藤兵衛翁の貴重な肖像写真をご恵与くださり、更には長之助翁の採集になる植物標本が、盛岡高等農林学校に保管されるに至った経緯の中で、文献では不明確な部分について、詳しい情報をご提供下さった。雪ノ浦達雄氏は、今では岩手大学には残っていない雪ノ浦参之助翁の肖像写真を、遠くまで縁故を辿って捜しだして下さった。盛岡正教会の司祭、ステファン内田圭一師には、管轄下の小教会・伝道所の古い教会銘度利加（メトリカ）を辿って、長之助翁が洗礼を受けた教会を特定するのにご協力いただいた。名須川道朗氏は、紫波町の歴史に関わる貴重な文献を、探して下さった。

岩手大学農学部教授吉川信幸氏は、植物病理学研究室の歴代教授の肖像写真を探しだして、その撮影にご協力下さった。附属農業教育資料館元館長 若尾紀夫氏（岩手大学名誉教授）および井上幸子氏には、資料の撮影をご許可いただき、資料撮影にご協力いただいた。農学部学部長 藤井克己氏は、歴代農学部長の肖像写真を撮影することをご許可下さった。村田古写真館 村田明氏は、乾燥標本の撮影を担当して、画像作成にご協力下さった。

東京復活大聖堂教会はニコライ大主教および東京復活大聖堂の写真掲載を無償でご許可下さった。

岩手大学教育学部教授重松公司氏と岩手県農業研究センター専門研究員高橋良学氏の両氏には、データベース作成過程で多くのご助言とご協力をいただいた。同じく教育学部教授土谷信高氏には、碑石台座の同定をお願いした。

そのほかにも、本稿を脱するにあたり多くの方々のお世話になっている。ご協力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。

またデータベースの作成にあたっては、日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費 課題番号168097）の助成を受けている。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 井上幸三 1981. 「日露交流史の人物 マクシモービチと須川長之助」 岩手植物の会 盛岡
- 井上幸三 1991. 「岩手植物自然史」 岩手植物の会 盛岡
- 伊藤篤太郎 1894. 須川長之助氏. 植物学雑誌 8 (83) : 44~45.
- 岩手大学農学部編 1962. 「回顧六十年」 岩手大学農学部 盛岡
- 鏡保之助 1930. 「感激」 盛岡高等農林学校 盛岡
- 牧野富太郎 1895. よう條書屋植物雑記（其二十）. 植物学雑誌 9 : 388~390.
- 牧野富太郎 1897. 雑録 ちやうのすけさうの信州報. 植物学雑誌 11 : 447~448.
- Makino, T. 1901. Observations on the flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo 15: 102 ~114. (p.110)
- Melichior, H. und E. Werdermann 1964. A. Engler's Syllabus der

Pflanzenfamilien I, II. Gebruer Borntraeger Berlin-Nikolassee

- 宮部金吾 1905. カール、ヨハン、マキシモヴィッチの伝. 札幌博物学会会報 1 (1) : 1~9.
- 盛岡高等農林学校創立記念祝賀会編 1913. 「盛岡高等農林学校創立十周年記念帖」 盛岡高等農林学校創立記念祝賀会 盛岡
- Nakai, T. 1916. Praecursores ad floram sylvaticam Coreanam VII. (Rosaceae). Bot. Mag. Tokyo 30: 217~242. (p. 233)
- Nakai, T. 1932. Notulae ad plantas Japoniae & Koreae XLVII. Bot. Mag. Tokyo 46 : 603~632. (pp. 607~608)
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 1988. 「日本キリスト教歴史大事典」 教文社 東京
- 大津源三郎 1910. 故露国植物学大家カール、ヨハン、マキシモヴィッチト共ニ忘ルベカラザル須川長之助翁. 植物学雑誌 24 (282) : 235~238.
- 札幌博物学会 1928. カール、ヨハン、マキシモヴィッチ氏誕生百年記念会. 札幌博物学会会報 10 (1) : 81~107.
- 紫波町史編纂委員会 1984. 「紫波町史 第二巻」 盛岡
- 高橋 壯 1997. 「須川長之助翁記念文庫」 岩手大学農学部 盛岡
- 富樫浩吾 1928. 須川長之助翁. 仙台市斎藤報恩会時報 24号 : 1~27.
- 富樫浩吾 1931. 長之助翁を偲びて. 巖手植物研究 1 (1) : 5~9.
- 東京復活大聖堂修復成聖記念誌刊行委員会編 1998. 「東京復活大聖堂修復成聖記念誌」 東京復活大聖堂教会 東京
- 山田玄太郎 1905. 須川長之助植物採集談. 札幌博物学会会報 1 (1) : 11~14.
- 吉田義昭編 1988. 「自他利益を旨とすべし 木津屋三五〇年略記」 盛岡
- 雪ノ浦参之助 1949a. 盛岡農専所蔵 須川長之助翁採集植物目録 (I). 東北生物研究 1 (1) : 27~30.
- 雪ノ浦参之助 1949b. 盛岡農専所蔵 須川長之助翁採集植物目録 (II). 東北生物研究 1 (2) : 71~75.
- 雪ノ浦参之助 1951. 盛岡農専所蔵 須川長之助翁採集植物目録 (III). 東北生物研究 2 (1) : 37~46
- 雪ノ浦参之助 1972. 須川長之助採集、植物標本目録. 岩手植物の会会報 9 : 1~8.

雪ノ浦参之助 1973. 須川長之助採集・植物標本目録（2）. 岩手植物の会会報
10 : 11~17.

附録 1 . 写真・図の出典等

- 図1 「東京復活大聖堂修復成聖記念誌」口絵より複写
- 図2 札幌博物学会会報10巻1号の口絵より複写
- 図3 記念切手「日米修好通商条約100年記念」2種より複写
- 図4 肖像写真（岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵）を複写
- 図5 2007年2月 筆者撮影
- 図6 2006年2月 筆者撮影
- 図7 2006年2月 筆者撮影
- 図8 2002年9月 筆者撮影
- 図9 2007年4月 筆者撮影
- 図10 2006年9月 筆者撮影
- 図11 2006年2月 筆者撮影
- 図12 特殊切手「高山植物シリーズ第4集」より複写
- 図13 2006年9月 筆者撮影
- 図14 2007年4月 筆者撮影
- 図15 2006年2月 筆者撮影
- 図16 2006年2月 筆者撮影
- 図17 1979年11月 筆者撮影
- 図18 2006年3月 筆者撮影
- 図19 肖像画 油彩（岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵）を複写
- 図20 鳥瞰図（岩手大学ミュージアム所蔵）を複写
- 図21 肖像写真（岩手大学農学部所蔵）を複写
- 図22 巖手植物研究1巻1号の口絵より複写
- 図23 池野和夫氏提供
- 図24 2006年8月 筆者撮影
- 図25 肖像写真（岩手大学農学部所蔵）を複写
- 図26 肖像画 油彩（岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵）を複写
- 図27 2007年1月 筆者撮影

- 図28 2007年1月 筆者撮影
- 図29 2006年3月 筆者撮影
- 図30 2007年4月 筆者撮影
- 図31 肖像写真（岩手大学農学部所蔵）を複写
- 図32 2006年2月 筆者撮影
- 図33 雪ノ浦達雄氏提供
- 図34 2007年5月 筆者撮影
- 図35 2006年3月 筆者撮影

附録2. 年表、マキシモビッチ・須川長之助及び関連事項

年 代		須川 長之助	マキシモビッチ	教育・科学・宗教	世 界
1827	文政10		露、ツォラ市にて出生		
1836	天保7			露、スモレンスクにてI. D. カサートキン(ニコライ)出生	
1838	天保9			露、ホテイナにてA. D. チハイ(アナトリイ)出生	
1842	天保13	岩手県紫波郡下松本にて出生			清、南京条約締結(アヘン戦争終結)
1850	嘉永3		ドルバット大学を卒業		
1851	嘉永4				清、太平天国の乱(~64)
1852	嘉永5		露都サンクト・ペテルブルグ植物園標本室の研究者		
1853	嘉永6		軍艦ディアナ号に乗り組んで世界周遊の旅に出帆		クリミア戦争勃発(~56) アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー、軍艦四隻を率い浦賀に来航
1854	安政1		ロシア沿海州に至り、アムール流域の植物を調査		日米和親条約、日露和親条約、日英和親条約締結
1855	安政2				日蘭和親条約締結
1856	安政3				ハリス、下田に着任(アメリカ初代駐日総領事)
1857	安政4		露都サンクト・ペテルブルグに帰着		下田条約調印
1858	安政5				日米修好通商条約 日蘭・日露・日英修好通商条約調印
1859	安政6		「アムール地方植物誌」に対しデミドフ賞授与さる	シーボルト再来日 ダーウィン「種の起源」発表	神奈川、長崎、箱館、新潟、兵庫の五港を開港
1860	万延1	蝦夷地、箱館に渡る	巡洋艦グリーンデン号にて箱館に入港上陸	ニコライの名で剪髪式 修道司祭の按手式	桜田門外の変、大老井伊直弼暗殺 清、北京条約締結

年 代		須川 長之助	マキシモビッチ	教育・科学・宗教	世 界
1861	文久1	長之助、領事館附属教会でマキシモビッチに邂逅、雇われる。植物採集の手ほどきを受け採集を助ける。秋、主従は海路横浜・長崎へ向う		ニコライ、領事館附属教会の司祭として来日	米、南北戦争勃発（～65）
1862	文久2	マキシモビッチ主従長崎到着。春、主従は横浜に戻り、横浜、江戸、箱根、富士山を採集、再び長崎に至り九州各地を採集		シーボルト、帰国	生麦事件、現横浜市鶴見区生麦付近にて薩摩藩士がイギリス人を殺傷
1863	文久3				薩英戦争、生麦事件の責任追及のためイギリス艦隊が薩摩藩を攻撃。米、リンカンの奴隷解放宣言
1864	元治1	横浜を出帆、サンクト・ペテルブルグに帰国			
1865	慶応1	信州へ採集		メンデル、遺伝の法則に関する論文「雑種植物の研究」を発表	
1866	慶応2	南部地方、岩手山、早池峰山、秋田駒ヶ岳、恐山へ採集			
1868	明治1				箱館戦争（～69）
1869	明治2				蝦夷地を北海道と、箱館を函館と改称
1870	明治3			ニコライ、修道司祭から掌院に昇叙	
1871	明治4	ロシア科学アカデミー会員		アナトリー、ニコライを補佐するために函館に到着	
1872	明治5			ニコライ、宣教の中心を函館から東京の駿河台へ移動	
1876	明治9			札幌農学校開校	
1877	明治10	日詰郡山教会でアナトリー神父より授洗。聖名ダニイル		東京開成学校と東京医学校を合併、東京大学創設	
1880	明治13			ニコライ、主教に昇叙。アナトリー東京に赴任、掌院に昇叙。「新約聖書」の翻訳完成	
1881	明治14			宮部金吾、札幌農学校を卒業	

年 代	須川 長之助	マキシモビッチ	教育・科学・宗教	世 界
1884	明治17		東京復活大聖堂着工、成聖式は91年	
1887	明治20	信州木曾駒、御岳、駒ヶ岳、浅間山、八ヶ岳、富士山、天城山へ採集		
1888	明治21	紀伊、九州および四国へ採集	宮部金吾、米留学の帰途マキシモビッチを訪問	
1889	明治22	東海、京畿、山陰、北陸および甲州地方へ採集 秋、伊藤圭介宅を訪問		
1890	明治23	南部、岩手山、早池峰山、秋田矢島、鳥海山へ採集	アナトリー、病気のため帰国	
1891	明治24	露都サンクト・ペテルブルグにて逝去	牧野富太郎、新称「チョウノスケソウ」（和名）を発表	大津事件、露国皇太子（後のニコライ二世）負傷 露、シベリア鉄道起工（～1905） 米、パナマ運河起工（～1914）
1893	明治26		アナトリー、露都サンクト・ペテルブルグにて逝去	

年 代	マキシモビッチ・須川長之助と関連事項	教育・科学・宗教	世 界
1901	明治34		
1902	明治35		第一回日英同盟協約締結
1903	明治36	盛岡高等農林学校開校（初代校長 玉利喜造）	
1904	明治37	須川長之助、盛岡高等農林学校の山田玄太郎を訪問	日露戦争（～05）
1905	明治38		第二回日英同盟協約調印 ポーツマス講和条約調印
1906	明治39		ニコライ、大主教に昇叙
1908	明治41	皇太子（後の大正天皇）、東北地方巡遊の折に本校にご台臨、山田玄太郎が長之助の採集になる標本等を説明	南満洲鉄道株式会社設立

年 代		マキシモビッチ・須川長之助と関連事項	教育・科学・宗教	世 界
1912	大正1		ニコライ、東京にて逝去 東京谷中霊園に埋葬	中華民国成立、清滅ぶ
1914	大正3			第一次世界大戦はじまる 日、ドイツに宣戦布告
1917	大正6			露、三月革命・十一月革命
1918	大正7			第一次世界大戦終結（ドイツ降伏）
1925	大正14	須川長之助、故郷にて逝去 下松本の共同墓地に埋葬 「須川長之助翁寿碑」紫波町上松本の志和稻荷神社社頭に建立		
1923	大正12		関東大震災で東京復活大聖堂の鐘楼・ドームが破損、内部焼失	関東大震災
1927	昭和2	札幌博物学会主催、「C. J. マキシモウィッチ氏誕生百年記念会」を北海道帝国大学中央講堂にて開催 マキシモビッチと須川長之助の写真、遺品、標本を展示	セルギイ、新大聖堂を再興（～31）	中、南京に国民政府成立
1928	昭和3	昭和天皇、陸軍特別大演習統監のため盛岡市に行幸 三代鏡保之助校長以下十一名、大本営にて献上品、研究業績等を説明、そのなかで長之助の事績を説明	野口英世、黄熱病研究中罹病しアフリカにて客死	中、張作霖、満洲で爆死
1930	昭和5	秩父宮雍仁親王、騎兵第三旅団第二十三連隊に見学入営中、本校にご台臨、富樫浩吾が長之助の事績を説明		ロンドン海軍軍縮会議
1932	昭和7	中井猛之進、チョウノスケソウの学名を <i>Dryas octopetala</i> L. var. <i>asiatica</i> (Nakai) Nakai とした		満洲国建国宣言
1949	昭和24	雪ノ浦参之助、長之助採集の標本を整理、目録を作成し発表（～73）	国立学校設置法公布（新制大学69校を設置）	北大西洋条約（12カ国調印）
1969	昭和44		ニコライを亜使徒日本の大主教聖ニコライとして列聖	
1971	昭和46	井上幸三「須川長之助物語」発表		
1978	昭和53	紫波町より名誉町民章および称号を授与さる		
1981	昭和56	井上幸三「日露交流史の人物 マキシモービッチと須川長之助」発表		
1985	昭和60	郵便切手「高山植物シリーズ第4集」チョウノスケソウ発行		

年 代	マキシモビッチ・須川長之助と関連事項	教育・科学・宗教	世 界
1988 昭和63	須川長之助顕彰会、紫波町城山公園に「須川長之助・マクシモービチ顕彰碑」建立		
1997 平成9	井上幸三「ダニエル須川長之助」発表 「名誉町民 須川長之助顕彰会だより」創刊号 高橋壯、農学部保管の長之助に関する全ての資料を目録と共に大学図書館に移管		
2000 平成12	大学図書館より長之助に関する全ての資料が農業教育資料館に移管されて公開展示		